



訃報

関一彦教授追悼

千葉大学先進科学センター 教授 石井 久夫

わたしは、関一彦先生が名古屋大学の教授に赴任された直後に助手としてチームに加えていただきました。当時、関先生は、銀塩写真の分光増感現象に関連して、色素とAgBrの界面の電子準位の接続問題を研究されていて、それに続く一連の有機-無機界面電子構造研究を始められようとしているところでした。無機表面の電子分光を研究していた私に、“有機固体と無機固体が接触した界面の不思議さ重要さ”を熱心に語ってくださり、界面研究の世界に誘って下さいました。このテーマは、基礎的なサイエンスとして奥深いだけでなく、有機エレクトロニクスという実用研究分野においても重要なものでした。一連の研究は、学術創成研究へと発展し、多くの成果を残されました。その間、関先生は国内外の大学や企業のデバイス研究者とも交流され、基礎研究と応用研究をむすびつけることも積極的に進められ、有機半導体の界面電子構造という一つの研究分野を作りあげられました。振り返ると、国際学会では先頭にたって多くの質問・コメントを発し、若い研究者からシニアの先生まで広く交流し日本に招聘したり、日本の若手を派遣するなど、国際的な研究ネットワークづくりにもご尽力され、学術振興会のCore-to-coreプログラムへと展開されました。

以上のような界面研究を進める上で、UVSORのBL8B2の存在は重要でした。汚染物として敬遠されていた有機材料に特化した光電子分光ビームラインを関先生は立ち上げられました。先生が広島大学に転出された後は、関先生と千葉大の上野先生のグループのメンバーを中心とするユーザーグループにより維持されました。関先生は、ビームライン管理のため名大雇用のポストクの派遣を続けると共に、流動部門や客員部門も活用したり、UVSOR関連で人事公募があるときは必ず候補者を推薦するなど8B2の維持・発展にご尽力されました。このビームラインは、超高真空下での単結晶基板上の高秩序有機薄膜界面の測定や、スピンキャストした実用的高分子薄膜ならびにその大気効果の測定など、有機半導体薄膜界面の基礎から応用にかけての幅広い研究ニーズに対応できる、世界的にも貴重なビームラインとなり、多くの研究成果を成し遂げてきています。

6月30日に関先生は帰らぬ人となってしまいました。7月2日、3日のお通夜、告別式でお別れしたのに、今でも電子メールの受信箱を開くとき、深夜のタイムスタンプのついた関先生からのメールが届いているような気がしてなりません。本当に大事な方を失ってしまいました。関先生の教えを受けながら研究を進めてきた私たちは、各人の心の中にいる関先生とディスカッションしながらそのご遺志を受けついで研究を発展させてゆきたいと思います。



2007年11月60歳お誕生日



2007年6月Bunsen Meeting

分子科学研究所 教授 薬師 久彌

2008年6月30日の関一彦氏（享年60歳）の訃報に接し、驚きと共になんとやりきれない思いが残っている。2007年10月27日-30日に北京で開催された第9回日中シンポジウムに関一彦氏が元気な姿（分子研レターズ57巻27頁の写真）を見せた僅か一ヵ月後に名大病院に入院したとの知らせを聞いたとき、全く信じられない思いであった。その後、「危機を脱した」との消息があり、今回の突然の訃報には愕然たる思いであった。関一彦氏とは学生時代短い間ではあったが、東京大学理学化学教室の赤松秀雄研究室で共に学んだ。1970年代から多くの物性化学研究者が有機導体の分野へ参入する中で、有機半導体薄膜の分野で独自の道を歩み、工学的な立場で研究されていた有機半導体薄膜、特に金属との界面の研究を精密科学にまで導いた手腕は並々ならぬものであった。数々の国際会議で基調講演を行い、学術創成研究代表者、21世紀COEプログラム名大物質科学国際研究センター拠点長、学振先端研究拠点事業コーディネーターとして活躍し、名実共に分子科学のリーダーであった。また温厚な人柄と几帳面な性格それにて的確に先を見通す洞察力は多くの人々に絶大な信頼感を与えていた。重責を担い、これからの活躍に期待が高まっていただけにいまなお悔やまれてならない。心よりご冥福をお祈りします

分子科学研究所 助教 山根 宏之

関一彦先生は平成20年6月30日早朝、名大病院にてご逝去されました。昨年11月下旬に体調不良で緊急入院され、その後の検査で急性骨髄性白血病との診断が下り、治療が始まりました。入院される前の先生は夕食後も深夜2～4時まで教授室で仕事をされていることが多く、徹夜されることもあるほど激務に追われており、病気の早期発見を逃したことが悔やまれます。関先生の入院中は准教授の大内先生と助教の金井先生のご尽力で、関研の研究・教育活動が進められましたが、関先生からも電子メールで研究室に連絡が届いていました。関先生は海外出張中で、出張先から研究室の指揮をとっておられる様な錯覚を関研メンバーは感じていたかもしれません。実際に治療の副作用でおつらい時もあったはずなのに、メンバーからのメールに以前と変わらず丁寧に返信しておられ、更にはご自身の教科書の執筆も続けておられました。そして、最期まで研究室に戻りたいと仰っていたそうです。本当に素晴らしく素敵な先生だったと思います。私は現在、小杉グループの助教ですが、この3月末まで関先生のポストドクを務め、4月以降もやり残した関先生の宿題をやっておりましたので、その経緯を知るもの一人として寄稿させていただきました。関先生からは研究以外にも数多くのご指導を賜りました。今後の分子科学の発展に微力ながらも貢献することで関先生への恩返しをしていこうと思います。

分子科学研究所 所長 中村 宏樹

関教授急逝の報に接し驚きと共に心痛の極みであります。小生が着任時には、既に分子研で活躍しておられましたが、分子研転出後も様々な委員会委員を務めてくださり、直接、間接に分子研の運営に極めて真面目に、そして建設的に貢献してくださいました。入院中に分子研への提言を纏めておられたのを知り（本号レターズ記事）、しかも、ご自身の運命を悟っておられたのではないかと感ずることを感じ、涙を禁じえません。まだまだ、これから活躍いただかねばならない時に、誠に残念であります。心よりご冥福をお祈り申し上げます。合掌。